

東京都桧原村のシクラメン栽培

佐々木 博

- | | |
|----------------|----------------|
| I はじめ | 5 林業構造 |
| II 桧原村の社会・経済構造 | III シクラメン栽培 |
| 1 人口 | 1 シクラメン栽培の導入 |
| 2 産業構造 | 2 シクラメンの受託栽培農家 |
| 3 農業構造 | 3 シクラメンの委託栽培農家 |
| 4 農地と作物 | IV おわり |

I はじめ

東京の西端に近く、山梨県と境を接して^{ひのはら}桧原村がある。東京駅から東端に近い村役場のある本宿へは56km、西端の三頭山(1528m)まで80kmの距離にある。東京駅から東隣りの五日市町のJR五日市駅まで直通電車で1時間40分、五日市駅から西東京バスで^{うずしき}笛吹まで58分、西端の集落でカプト屋根の多い数馬までは66分を要する。最低点は五日市町との境界に近い秋川の段丘面上にある桧原診療所付近の392mから、西端の三頭山1528mまで、比高1136mに及んでいる(Fig. 1)。東西に平行して三頭山から東に流下する北秋川〔北谷〕と南秋川〔南谷〕は役場前で合流し、途中狭い谷と段丘面を形成し、集落をのせている。両谷の間には900mほどの浅間尾根が介在し、南谷は1000mほどの笹尾根で山梨県上野原町と境しているが1988年3月甲武トンネルが開通した。

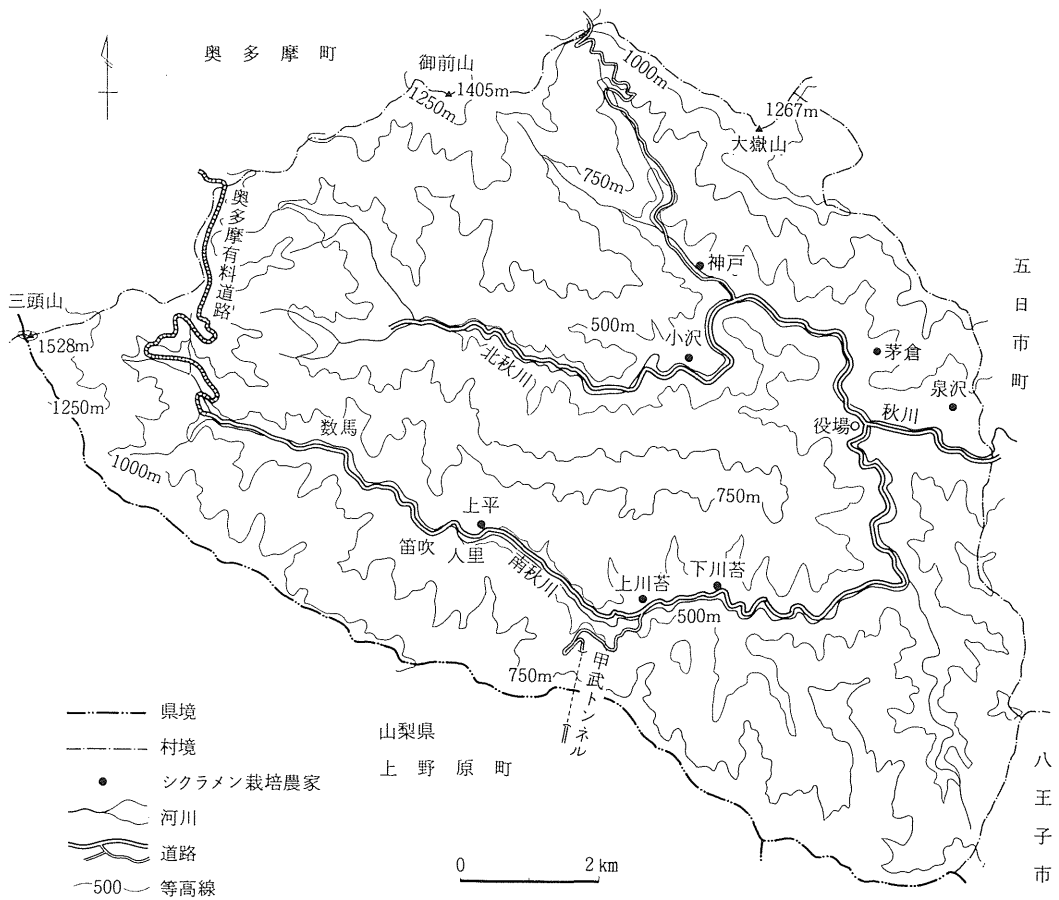
1988年、1989年の2年にわたり、桧原村でみられるシクラメンの山上げ栽培の実態を調査し、その成立要因と、地域に与えた影響を考察するのが本報文の目的である。

II 桧原村の社会・経済構造

1. 人口

1985年の人口4,012人は東京都陸地部では最も小さく、面積104.9km²は、奥多摩町、八王子市に次いで3番目に大きいため人口密度38.2も最小である。そのため都全体に占める割合は人口で0.03%、面積で4.85%である。人口は第1回国勢調査時(1920)5,389で以後微増して安定していたが、第2次大戦後の臨時国勢調査時(1947)の6,642をピークに以後減少し続け、1985年にはピーク時の60%の4,012人にまで減少した。1950年以降センサスの度(5年間)ごとに人口は300~400人減少し、最近5年間(1980~85)で漸く218人の減少でおさまっている(Table 1)。

1世帯当たり人員3.82(1985)は日の出町(3.83)とともに都最高、1980年は3.99と文字通り最高で、東京都(2.60)よりは大きいことは当然としても、日本全国(3.07)よりも大きく、相対的に大世帯村となっている。性比(女子100人に対する男子の数)は105.3と全国の96.7と比べて都市型となっ



第1図 松原村概観図

第1表 松原村の人口・農家の推移

年次	総人口	農家数	う ち		
			専 業	1 兼	2 兼
1950	6,373	854	0	327 (38.3)	421 (49.3)
1960	5,650	763	0	207 (27.1)	561 (73.5)
1965	5,396	725	28 (3.9)	75 (10.3)	622 (85.8)
1970	5,036	692	16 (2.3)	10 (1.4)	666 (96.2)
1975	4,686	527	20 (3.8)	17 (3.2)	490 (93.0)
1980	4,230	511	21 (4.1)	5 (1.0)	485 (94.9)
1985	4,012	452	26 (5.8)	5 (1.1)	421 (93.1)

(各年次人口・農業センサス)

ているが、65才以上の人口割合は19.4%で全国の10.6%の倍近い。松原村自身でも65才の老令人口率は1980年は13.9%であったので、最近5年間で急速に増加したことを示している。1980~85年の人口減少率は-5.2%であったが、世帯のそれは-3.4%と少ない。しかし世帯の縮小化が進んでおり、すなわち世帯規模は3.99から3.82となっている。

2. 産 業 構 造

産業構造の変化を就業者数でみると、1960年に第1次産業が52.2%と過半を占めていたが、年々減少し、1985年にはわずか5.7%となってしまった（Table 2）。とくに1970～75年の第1次産業人口は半分以上も減少し、その前の1965～70年も221名も減少するほど大きく、1960年代後半から70年代前半にかけての10年間の変化が大きかった。第2次産業人口は1970年までは急増したが、以後一定水準に留まり、第3次産業人口は一貫して増えており、ついに51.2%と過半を占めるに至った。とくに1970～75年の5年間の増加が急であった。就業者数は1970年の2,152人をピークに以後人口の減少と軌を一にして漸減傾向にある。最近5年間の第1次産業人口の減少率は51%と大きかったため、1985年の第1次産業就業者はわずか5.7%・104人になってしまった。

第2表 松原村の年次別産業別就業者

	就業者数	第1次産業		第2次産業		第3次産業	
		人	%	人	%	人	%
1960	2,032	1,060	52.2	529	26.0	437	21.5
1965	1,999	751	37.6	642	32.1	605	30.3
1970	2,152	530	24.6	909	42.2	713	33.1
1975	1,896	223	11.8	813	42.9	858	45.3
1980	1,877	210	11.2	795	42.4	870	46.4
1985	1,818	104	5.7	781	43.0	931	51.2

（各年次人口センサス）

松原村の主力産業は就業者数でみると製造業（533人）・サービス業（426人）・卸小売業である（Table 3）。しかし全国の産業別就業者率と比べると、林業（特化係数14.5）と鉱業（6.0）を筆頭にサービス業（1.5）と建設業（1.4）が相対的に高い。鉱業は役場南西の採石業であるが、サービス業、建設業は松原村から通勤して他市町村で働いているものである。

3. 農 業 構 造

第1次産業就業者は1960～85年間で1/10に激減したが、農家数は約4割の減少でしかない。1985年452戸の農家のうち第2種兼業農家は93.1%、421戸で、専業はわずか26戸、5.8%、に過ぎなかった。それでも専業農家は1970年以来漸増傾向にあり、それとは逆に第1種兼業農家は漸減している。農家1戸当たり経営耕地面積が16a（1985）では農業の自立はできず、第2種兼業農家率のうち、78.1%が雇用兼業農家、15.0%が自営兼業農家である。雇用兼業353戸のうち恒常的勤務は255戸、日雇、臨時雇は97戸で、多くは定職をもっている。自営兼業68戸のうち林業との兼業は10戸に過ぎない。

第3表 松原村の産業構造 1985

	就業者	%	(全国)
第1次産業	(104)	(5.7)	(9.3)
農業	49	2.7	8.4
林業	53	2.9	0.2
漁業	2	0.1	0.7
第2次産業	(781)	(43.0)	(33.0)
鉱業	21	1.2	0.2
建設業	227	12.5	9.1
製造業	533	29.3	23.7
第3次産業	(931)	(51.2)	(57.5)
供給業	12	0.7	0.6
運輸通信	110	6.1	6.1
卸小売	244	13.4	23.0
金融保険	32	1.8	8.8
不動産	8	0.4	
サービス	426	23.4	20.5
公務	99	5.4	3.5
計	1,818	100.0	100.0

1985人口センサス

1985年の452農家のうち436戸、実に96.5%が農業専従者がいない。農業従事者1,917人（男1,000, 女917）のうち、男は138人が70才以上、60才台の107人を合わせると245人、1/4が60才以上である。女子もおなじで、70才以上が142人、60才台127人を加えると269人、29.3%が60才以上で農業従事者は高令化している。

4. 農地と作物

平地はほとんどなく、農地は狭い谷の段丘上と山地斜面に展開している。総耕地面積72haは村域のわずか0.7%を占めるに過ぎず、452戸の農家で平均すると1戸わずか16aにしかならない。1950年耕地は現在の約3倍（207ha）あったが、農家数も約倍近い854戸あったので1戸当たり耕地面積は24aで、経営耕地面積の零細性は同じであった。耕地の種類別では田は無いに等しく、樹園地が11haある他は60haは畑である。樹園地のうち7haは果樹園、4haは茶園である。畑地60haのうち1985年の農業サンセス調査日前1年間作付しなかった農家が197戸（44%）・16haあり、労働力不足から放棄されている畑が1/4強もある。耕作放棄地は226戸（50%）・31ha（43%）もあり、農業は崩壊していると見てもよい。

崩壊した農業の中で、わずかに露地で作付されている作物は57ha（1985）、上位2位はいも類（19ha）・野菜類（17ha）であった。果樹の中では栗（5ha）と梅（1ha）が主なものである。施設のある実農家は4戸、ハウスが3戸・4a、ガラス室が2戸・5aであり、栽培物は花卉・花物が2戸、27a、野菜が2戸・1aであった。施設栽培の野菜はトマト・キュウリ・ナス・ピーマンであった。畜産は乳牛が3戸で10頭いる程度で低調である。

1戸16aの耕地のため、農産物販売額のない農家が383戸（84.7%）、販売額のある農家は69戸（15.3%）に過ぎない。販売額があっても51戸（74%）は販売額10万円未満であり、大口は200万円台1戸、700～1,000万円台1戸であり、大口は施設利用の花苢栽培と思われる。販売額1位の農業部門で47戸（68%）は雑穀・いも類・豆類で、6戸が工芸作物、同じく6戸が「その他の作物」でこれがシクラメンを主とした花苢であろう。果樹類5戸、野菜類1戸、養蚕1戸である。工芸作物はコンニャク芋で、3年生のものが加工される。以前は各農家が石臼でコンニャク芋をついて自家製コンニャクを作っていたが、現在は少なくなり、数馬などで手作りコンニャクを土産物として売っている。秋川の清流を利用したワサビも量は少ないが、山村にとって貴重なものである。

5. 林業構造

村域の93%が林野で占められている桧原村の林野面積は9,756ha（1980）、総世帯1,062の約4割の439戸が林野を所有する山村である。林野の89.8%、8,758haが私有林、9.6%・937haが都有林、0.6%・61haが村有林で、国有林はない。西端の三頭山（1,528m）周辺が都民の森として開発されている。

林家の多くは農家であり、農家林家は1985年には307戸（総農家の67.9%）であり、林野を保有していない農家は145戸（32.1%）に過ぎない（Table 4）。非農家も含めた総林家の規模別山林保有を

みると、1～5 ha層が47.2%と最も多く、次いで0.1～1 ha層が22.3%、合わせて69.5%が5 ha未満層である。農家林家を1985年でみるとやや保有規模が大きい。20ha以上層では農家林家の比率がやや高い。関東平野にみられるような平地林から落ち葉を集めて推肥にするための林の存在に比べ、桧原の場合、農地が狭いので落ち葉集めよりは純粋な育成林業である。そのため人工林率は67%と高い。これは1923年の関東大震災の復興材として搬出に便利なところから伐採され、その後造林されたことと、第2

次大戦中および戦後の復興材搬出後造林されたものが多いためである。1950年代後半は林業経営がそれなりに経済的に成立していた。しかし1960年代後半から輸入材の増加と、高度経済成長による賃金高騰による山林労務者の確保がむづかしくなってきた。さらに鉄材による足場組立が一般化して、小径木の小角材や足場丸太などを得意とする桧原の間伐材林業は不振に陥っていった。

林家の主業を1980年についてみると、農家林家356戸のうち日雇・臨時雇152戸、恒常的勤務136戸、農業19戸、林業10戸、その他39戸であった。非農家林家53戸のうち恒常的勤務13戸、日雇・臨時雇11戸、林業3戸、その他26戸であった。林家のうち農家・非農家合わせて林業を主業とするものは13戸に過ぎない。

農家林家のうち林業に従事した世帯員345人（1980）のうち、男331に対し女14と、斜面でのきつい山林労務はほとんど男の仕事となっている。農家で自営林業をやっている282人のうち、林業従事日数が29日以下が198人、30～59日が52人、合わせて250人（88.7%）が2ヵ月未満である。逆に雇われ林業が主な農家林家63人のうち、就労日数が150日（5ヵ月）以上が34人（54.0%）、60～149日が18戸で、林務就労日数が当然のことながら長い。非農家林家世帯員28人はすべて自営林業が主で、雇われ林業が主の人はいない。しかし28人のうち23人が林業就労日数29日以下と短く、農家林家世帯員とほとんど差はない。非農家自営林業家といっても就労日数が長いわけでない。

1950年代まで桧原村の男は冬季炭を焼き、3時間かけて五日市町の炭問屋へ持参し、帰りに穀物、衣類を買って帰った。シクラメンの受託栽培をやっていた島崎栄作（79才）は馬1頭飼い、五日市町までの木材などの駄賃稼ぎをしていた。同様に川上苔の山本福松（60才）の父は馬車引きをやっており、谷奥にある数馬の人のもってきた炭を仲継貿易のように五日市へ運んでいた。炭の売値は、五日市商人の言われるがままで、値が折り合わないからといって、持ち帰ることはできなかった。

第4表 桧原村の林家構造

山林規模	1980年		1985年	
	林家数	%	農家数	%
保有山林なし			145	
0.1～1 ha	98	22.3	56	18.2
1～5	207	47.2	143	46.6
5～10	67	15.3	53	17.3
10～20	32	7.3	23	7.5
20～50	10	4.5	23	7.5
50～100	13	3.0	8	2.6
100≤	2	0.4	1	0.3
計	439	100.0	307	100.0

（1980林業事業者調査，1985農林センサス）

Ⅲ シクラメン栽培

1. シクラメン栽培の導入

書かれた記録がないため、人の記憶を聴き取りにより整理してとみると、次のようである。北秋川上流部小沢の旧北檜原小学校（現渋谷区林間学校施設）裏にある峯岸登（87才）は昭和3・4年頃立川

にある都立農事試験場からシクラメンの種を領けてもらい60鉢ほど栽培した。第2次大戦が激しくなってきた、ガラス温室が敵機に反射して見えると言う理由で黒く塗ったりしてみたが、そのうちに中止することになった。戦前はドラム缶で湯をわかして温室を暖房したが、技術的な面は調布市の温室農家から指導を受けた。

戦後は1984年から趣味を始め、サラリーマンを引退した者など5人で小沢園芸組合を結成して栽培を再開した。1988年には1,200鉢のシクラメンを栽培し、親戚・近隣者・渋谷区林間学校の宿泊客や口込みで府中などから購入に来たりしてさばけている。東京の小売価格の半値(1鉢1,000~1,500円)のため、販売に困ることはなく、1988年には都の補助金など532万円で21坪の温室を新築した。温室は埼玉県三芳の業者が作り、コショウラン〔蘭〕など野草専門に栽培していく計画である。北秋川上流部は南秋川と違って通過道路でなく行き止りのため、発展せず、人口の流出が激しく、小沢で離村農家を買ってウィークエンドハウスにしている人が7~8人いる。

1986年村内にあった8つの小学校が統合して本宿にある中学校北隣の檜原小学校(8学級、生徒数225人、1987)に統合された。南谷最奥の数馬分校(3学級、15人、1987年)は明治7年(1974年)開校した数馬小学校で、本宿まで18km、高度差600mもあるため、統合されずに分校として残った。しかし中学校(7学級、155人、1987)は統合中学校のみで、小中学生には村でバスの定期代を補助し、それによって西東京バスを運行させ、合わせて一般乗客のため運行回数を維持するのに役立っている。スクールバスにすると一般客が乗れず、夏休みなどの人件費負担を考えると路線バス定期券の補助の方が効率的である。北秋川谷奥の旧藤原小学校校舎(海拔525m)には、東京の演劇グループが練習場として借用している。その他地区図書館など、集会場の利用がなされている。

檜原村でシクラメンを受託栽培している農家の組合である「高冷地育苗研究会」(1984年現在で会員8名)会長吉沢宏(1989年で87才)によると、東京オリンピックの年1964年9名でシクラメンの受託栽培を始めた。コンニャク、キャベツ、マユの他現金収入源が少なかったところへ、西多摩農業改良普及員の誘いがあったため、吉沢氏は2,000鉢、森林組合長でもある現村長の夫人中村登喜枝が、1,000鉢などであった。その後増減があり、1984年の役場にある会の名簿には8名で、氏名・住所・年令が記されている。

吉 沢	宏	茅 倉	73才
高 橋	享	上 平	37
高 取	六 郎	泉 沢	53
吉 沢	栄 一	茅 倉	54
島 崎	栄 作	神 戸 ^{かの}	74
清 水	成 道	下川苔	61
中 村	登喜枝	笛 吹 ^{うづしき}	59
坂 本	貴美江	笛 吹	51

平均年令57.8才とイノベーション導入としては高令であった。中村は南秋川の中流部^{へんげり}人里の右岸支流笛吹川を南へ入った左岸標高600m付近の畑に木棚を設けてシクラメンの受託栽培をやっていた

が、一つの西の谷森沢に特別養護老人ホームができ、そこの職員になったため止め、木棚のみ畑に残っている。坂本は人里にあるコンニャク工場井上店に勤めるようになって止めた。井上コンニャク店は近所の主婦ら12・13人が働いており、車で都内のスーパー、生協に納入している。さしみ用コンニャクには青のりや七味トウガラシを入れたりして工夫をこらし、好評を博している。奥多摩有料道路に通ずる道路に面しているため、土産として買って帰る観光客も多い。

2. シクラメンの受託栽培農家

東京都大田区中馬込を中心とする馬込園芸研究会は、夏季シクラメンを高冷地で栽培するため軽井沢や八ツ岳山麓に委託したこともあった。高冷地で栽培すると、①花芽の成育が促進されて、低地よりも早く開花させることができ、②夜間冷えて株が大きく成長するためである。シクラメンは毎日水をやり、腐った葉をとってやり、消毒薬を撒布する必要があるため、大田区から毎週委託地に出かけに行く必要がある。軽井沢よりは近くて、標高450m～600mで受託労力のある檜原村が選ばれた。

1987年2月27日契約の「花き委託管理契約書」が立会人として参加した檜原農業協同組合に残っているのでここに紹介する。

委託者 波田野 章 他一名（以下甲と言う）と受託者 吉沢 宏（以下乙と言う）との間に下記の条項により花き（鉢物）委託管理の契約を締結する。

記

第1条 委託場所

東京都西多摩郡檜原村3500番地の乙が所有する土地

第2条 管理条件

甲の指示する方法で乙は適切なる管理作業を実施し、これに要する労力は乙の負担とし、この労賃は別に定める規定により甲が支払うものとする。

第3条 受託条件

1. 鉢数・床面積は3,500鉢とする。
2. 受託期間中の管理はかん水とその他の生産に必要なこと。
3. 鉢の植替、薬剤の散布等は甲が行うが、薬剤散布については乙が協力する。

第4条 管理経費及決算について

1. 委託管理期間中の管理費は鉢当たり48円とし、委託期間は100～120日間とし、持込面積で（病気等で不足した場合は補充してもさしつかえない）甲が乙に山上げの時 円山下げの時 円を2回支払うものとする。代金支払方法は檜原農業協同組合にある受託者の貯金口座へ振込みます。
2. 肥培管理のため必要な経費は、甲の負担とする。

第5条 損害賠償

管理作業中において、又天候障害等の人力に及ばない不可抗力による損失は、甲乙協議の上

認定する。

第6条 この条約に規定されていない事項については、その都度連絡を密にし、甲乙協議の上誠意をもって処理する。

以上契約の証として本書を2通作成し、甲乙各1通を保有する。

昭和62年2月27日

委託者(甲)	住所	東京都大田区中馬込3-20-13
	氏名	波田野章 [㊟] 他1名
受託者(乙)	住所	東京都西多摩郡檜原村2,155
	氏名	吉沢 宏 [㊟]
立会人	住所	檜原農業協同組合 経済指導課 宇田俊史 [㊟]

同じ契約は受託者高取茂代と委託者波多野章他1名との間で、さらに受託者嶋崎栄作と委託者東京都昭島市拝島町3-5-6高橋清一との間で、また受託者嶋崎栄作と委託者東京都昭島市大神町4-1-17小室栄久との間で締結されている。

契約は当初は毎年やっていたが、近年は2年に1回2月に行っている。天候にもよるが大田区馬込で5軒ほどの園芸農家が種子から発芽させた4寸鉢に入れたものをミカン箱に入れたものを7月頃檜原の受託農家へもってくる。苗が成長するにつれて3回ほど漸次大きな鉢に植え替えてやり、6寸鉢(直径6寸の鉢、1寸=3cm)か7寸鉢の大ききで馬込へ下ろし、温室で仕上げ栽培をして、11月からクリスマスにかけて販売する。7月に受託して、毎日水をやり、葉ぞろえをし、腐敗葉を除去し、馬込から週1回やってきて消毒するのを手伝い、夏日射しの強い時は昼間15時頃までは^{すのこ}簀子をかけてやり、10月15日頃委託者が取りに来るまでの世話をする。

受託料は1鉢48円といった契約の仕方と、棚の長さ1間4,362円といった契約の仕方の2通りがある。委託者は馬込から早朝車で消毒薬材などを乗せて檜原村の委託者の家まで、夏シーズン100~120日の間に10~15回も行かなければならないので大変な仕事である。

1988年度11月27日現在、檜原村役場メモによると、地域別、人別のシクラメン委託・受託数は次の通りである。

委託側	}	大田区2,500 (吉沢1,800, 高取700)
		八王子4,000 (高取2,500, 清水1,500)
		昭島3,000 (嶋崎3,000)
		東村山5,000 (山本3,500, 清水1,500)
		浦和1,500 (清水1,500)
		計 16,000 (鉢)

(所在地・海拔m)	
受 託 側	吉沢 宏 (茅 倉400) 1,800
	高取六郎 (泉 沢400) 3,200
	清水成道 (下川苔375) 4,500
	島崎栄作 (神 戸375) 3,000
	山本福松 (上川苔420) 3,500
計	16,000 (鉢)

村内委託者…高橋 享 (上 平475) 7,000

 23,000 (鉢)

他に小沢園芸組合の自主栽培のものがある。

受託農家はオリンピックの年から25年間もシクラメン栽培をやっていると栽培技術のノウハウを習得し、自分でも苗を馬込などから1鉢42円で購入して栽培している。10月～12月に入ると6寸鉢で2,000～2,500円、7寸鉢で、3,000～3,500円で販売出荷する人もいる。東京の花屋が電話で注文して大量に引き取りに来たりする。1964年に9名で始めたが、2戸は栽培技術が未熟で腐らせてしまい、止めてしまった。

馬込から5名の園芸農家が委託し、1970年代は檜原村全体で3万鉢も受託していたが、受託農家側が高令になったためや、交通の渋滞が年々はげしくなり、委託を止める人が出てきて、1989年には委託者は波多野憲一郎一人になってしまった。受託者の島崎栄作（会長吉沢宏の同級生）も79才の高令で花の世話ができなくなってきたことと、馬込の2戸が茨城県協和町に自らの農園を開き、夏の間そこに泊まり込んで世話をするようになって檜原村へ委託する必要がなくなった。嶋崎は1988年を最後に25年間のシクラメンの受託栽培を止めたが、同市昭島と馬込から4,500鉢の委託を受け、委託料も1鉢82円となっていた。しかし、棚は老朽化し、止める潮時でもあった。委託料は契約時に1/3、山下ろしの時2/3が支払われた。自主栽培のシクラメンは半製品として出荷する場合には、即座に現金で振り込んでくれる。嶋崎の長男は昭島市の工場に勤めている。

受託シクラメンから脱出して自主生産に重点を移し、地域産業にまで成長している農家もある。奥多摩有料道路に通ずる南秋川の^{へんぼり}人里の高橋享は2度の都補助金で50坪のガラス温室4棟の他パイプハウスなど400坪と育成棚70をもち、4人（2人は笛吹、2人は上平）の女子労働を雇っている。父の代は半農半林のシクラメン受託農家であったが、青梅農林高等学校卒業後、22才で花卉栽培を始め、若さ、南向の段丘面、谷が広く日照時間の長さ、奥多摩有料道路への観光ルートに沿っていることなどから、シクラメン1万鉢を生産する程までになった。春物としてサクラソウ・エビネなどの草花なども手がけ、観光販売でさばけない分は立川・久留米・練馬などの花市場に出荷するが、90%は庭先販売と千葉・東京・横浜・埼玉などの固定客でさばける。栽培技術は親戚の前記峯岸登に習い、新しいランは調布市下布田のラン栽培者小田善一郎の委託栽培で習得した。南秋川最奥の数馬の山本氏に

シクラメンの委託をしているほか、上川苔の山本氏、下川苔の清水氏に10年ほど委託していた。自分の敷地は狭く、20a程度の耕地を谷の下の方へ埋め立ててパイプハウス建設用地としている。主な材料費としては鉢・土・消毒薬で、土は五日市から半分できあがった赤土をもって来る。雇用労力は8時30分～17時まで、1時間の昼食時間と2回のお茶の時間がある。

シクラメンの苗は3月上旬馬込から購入し、6月鉢替え、7月にもう一度鉢替え、9月に仕上げ鉢に移し、10月頃からハウスに入れ、十一月頃から販売したり、半製品のまま仲間に出荷する。ガラスハウス200坪のもの1棟をトピー工業施工で2,200万円（近代化資金と農協融資）で建てた。現在家族は母と経営主（42才）と妻の3人でやっている。

シクラメン栽培組合会長吉沢宏は嶋崎と同級生の79才、委託栽培から漸次自主栽培分を増やしてきた。灌水の水は沢の水を利用しているので無料であるが、町営水道も併用している。かつて1万鉢の委託があったが、平地のない檜原村では余地がなく、素人では技術がなくて腐らしてしまい、委託者にも受託者にも迷惑をかけることになった。長男（52才）は自分の山林6haのみならず、森林組合の造林を担当しているが、シクラメン栽培を5～6年後に継いでくれることを見越して1989年4月32坪のガラス温室を都補助450万円、自己負担150万円、計600万円で完成した。600鉢入るスペースである。1988年実績は委託2,000鉢、自主栽培700鉢、他に趣味で盆栽と若干の自給用の野菜栽培をしている。吉沢宏に対し1984年6月18日、大田区馬込園芸研究会20周年日に当り会長波多野金次郎より、シクラメン冷涼地栽培の貢献に対して感謝状が贈呈され、吉沢家の居間の額縁に納まっている。

吉沢宏宅の斜面のすぐ下にある姉の家吉沢栄一もかつては委託4,000鉢、自主栽培1,000鉢ほどやっていたが、身体をこわし、奥さんが中心に400鉢の半製品栽培をやっている程度である。

五日市町から檜原村へ入り、^{しもとご}下元郷で秋川を北に渡ると「泉沢シクラメン園」の看板がある。戦前峯岸登とシクラメン栽培をやったり、戦後1965年に再開、1985年にフレームで栽培し始めた。高取六郎（58才）の父の代に始めたが現在は妻茂代（55才）一人でやっており、5～7月の鉢替え時や夏の水やりの時におばあさん（78才）が手伝う程度である。おじいさん（83才）は昔食糧事務所に勤めており、主人六郎は造園の下請をやり、娘（30才）は東京女子体育大へ通学している。

馬込の波多野憲一郎から3,500鉢受託、1,500鉢半製品として自主栽培している。1988年は委託は波多野1軒のみであるが、以前は5人から委託を受けていた。契約は棚1間3,000～4,000円で鉢の大きさにより若干違う。自主栽培用に温室をもっているが、2割は腐ったりして売れず、販売は1,200鉢程度。売り値は7号鉢3,500円、6号鉢2,500円、5号鉢1,000～1,500円。11月～12月半ばが販売のピークで、7割が観光客に、3割が福祉関係に販売しており、年内には完売し、不足分は上平の高橋享から譲ってもらう。1965年に栽培を初めて以来3～4年は9月半ばに播種したが苗が良く育たないので、現在は馬込の波多野章から3～5月頃3号〔寸〕鉢で1本70～80円で購入している。ガラス温室2棟50坪保有している。1965年主人が村役場を止めてシクラメンを始めた10年間で量的にはピークで、金銭的には現在の方がよくなっている。シクラメンを始める前は養蚕と自給用水田とさつまいもなどをやっていた。保有する30haの山林は枝打ちする位。

上川苔の山本福松（60才）は1974年から東村山秋津の新井農園のシクラメンを受託した。高橋享の

誘いによるもので、母が高橋のおばあさんと同じ南隣する山梨県上野原町桐原の出身であるためである。1987年鉄パイプの棚110坪が新設されが、すべて委託者の負担で、地所貸し屋に近い状態である。4,000鉢を7月～10月上旬まで、主人が管理している、棚1間3,000円であるが、契約書はなく、口約束である。新井園芸は軽井沢で夏季に泊り込みで管理していた。水は沢の水を使っている。

下川苔の清水成道は道路と母屋の間の以前水田であった斜面に棚を設け、シクラメンの委託栽培を1981年からやっている。山本福松の友人の紹介で始めたもので、1988年、4,500鉢を3人から受託している。八王子市柚木の佐藤、東村山市の新井、浦和市の武華からそれぞれ1,500鉢ずつである。6月末にシクラメンを持参し、10月いっぱい引きあげる。棚契約で1間で管理報酬は3,300円、1間では30鉢並べられる。灌水のため町営水道の費用は委託者に負担してもらっており、受託農家側としては、地所貸し料と労賃分を受け取ることになる。林業が不振で、息子は30分かけて秋川市へ通勤している。

3. シクラメンの委託栽培農家

1964年に東京都大田区馬込の「馬込園芸研究会」が檜原村の9戸に委託栽培してきたのが始まりで、その後委託者は八王子、昭島、東村山、浦和などに拡がり、檜原村内でも高橋享のように村内の他人に委託する者も出てきた。端初を開いた馬込園芸研究会は1964年に発足し、会員は7名、会長はシクラメンの苗供給者でもある波多野章である。会員6名は、①会長 波多野章（中馬込、馬込シクラメン園）、②君島惣一（仲池上）③波多野憲一郎（中馬込、光和花園、民生委員、PTA会長）、④波多野金次郎（中馬込）、⑤波多野晴雄（中馬込、1988年死亡、息子一治シクラメン半製品栽培していたが中止）、⑥河原堅次（中馬込、シクラメンはやらすコショウランのみ）、⑦野村芳雄（横浜市緑区田奈町23-3、83才）。野村は馬込の環7に面する土地800坪でシクラメンをやっていたが、排気ガスなどで空気が悪いことと、檜原村の高取へ委託栽培していたが、片道3時間もかかり、土地も良くないことから、自分で管理できる場所として、横浜市に1,000坪購入して1972年移転した。一種の転住Aussiedlungである。馬込では農協花卉部長をやり、技術は芳雄の弟（故人）が用賀にあった農大園芸学科の副手をしていたところから習得、弟の没後兄が引き継いで、83才の高令にも拘らず1万鉢もやっている。伊藤忠商事に勤めていた長男を止めさせて手伝わせたものの、長男はギックリ腰となって止め、再びコンピューター・ソフトウェア会社の課長となっており42才。芳雄は近隣の雇傭労働を利用しながら一人でやっており、馬込時代には波多野章らを技術指導した。

現在馬込ではシクラメン栽培をやっているのは4軒となっしまい、うち2軒は茨城県協和町に夏季育成園を開き、山上げ栽培の代行機能をはたすようになり、夏季6ヵ月ほどを父子2人、あるいは父子交代で泊まり込んでシクラメン管理をしている点が共通している。檜原へ山上げしているのは波多野憲一郎一人になってしまった。

協和町の二つの夏季シクラメン農園

君島惣一55才は1977年より、国道50号に沿って北側にある上野沼北端の海拔50m程の山林6.1反を

1反300万円で購入。上下2筆に分れ、台地部2.5反、低地部3.6反あり、山林を開いて台地部に60坪のパイプハウスとビニールハウスを、低地に棚を設けた。当地に農園を開いた動機は、檜原村へ20年間中村登喜枝など5軒に委託していたが、交通渋滞で檜原へのアクセシビリティが低下し、かつ他人への委託ではシクラメンの十分な栽培管理ができないこともあったが、妻が眞岡市出身でこの土地に親しんでいたことであった。台地上に管理棟（協和町蓬田字東原446）を建て、立教大経済学部卒の26才の長男と2人で6月半～12月半までの夏半年を過している。大田区仲池上2丁目の本宅には80才の父・妻・長女が住んでおり、トマト・キュウリや大輪の切花をやっていたがハウスと宅地を含めて2反ほどの広さがある。6月半3寸鉢のシクラメンの苗を協和町へ持参し、枯葉取り、葉組み、灌水などの世話をする。灌水には地下水を利用するが、生活用水には町営水道を利用する。

夏季の日課は5時～8時灌水、9時～12時枯葉取り、13時～19時枯葉取り。日没後はやることなく早寝早起きとなる。海拔50mで高冷地ではないが、朝昼の気温差が大きく、高冷地と同じ効果がある。1989年は6,000鉢を栽培、10月末からは寒くなってくるのでハウスに入れると同時に、いすゞElfのトラックで1回600鉢ほど乗せて仲池上へ運ぶが常磐高速利用で2時間を要する。70%は庭先販売であり、30%は花市場へ出し、平和島にある大森園芸市場などである。現在は手紙や電話で、誕生祝・入学祝などの贈答用の注文があり、宅急便で関東地方なら1,000円、本州以内なら1,200円で送れる。

以前は山梨県石和市より半製品を買ってハウスで仕上げをして出荷したりしていたこともあった。今回東京農工大の荒川先生の指導を受け、播種も自分でやり、シベリン処理して花芽が多く立つようにしている。仲池上ではクンシラン・シュペルチジューム（食虫植物の一種）などの趣味でやっているが、シクラメンの単品生産は君島家のみ。鉢はサニーポット行田から共同購入、腐葉土は石橋から、パイプハウスやビニールハウスのビニールは1棟70～80万円を用する。原則として毎年ビニールは取り替えた方がよいが、実際には2年毎くらいになる。用済みビニールは細かく切って東京で粗大ゴミとして出す。税金は青色申告で粗収入で1,000万ほどであるが、不動産収入との比は1：1位である。長男「会社勤めも可能ではあるが、父を放っておくわけには行かず、手伝えることになり、目下技術を習得中。これだけ遊ぶこともしないで近所づきあいもなく、茨城の田舎で働いているのだから、シクラメンが良く成育し、高く売れて欲しい。」父「もう5年働いて、60才になったら、経営を息子に譲り、海外を含め旅行したい。そうしないと人生が働くだけでつまらない。」1983年と1989年明治神宮で11月1日に行われるコンクールで大臣賞を獲得している。そこは6号鉢までは2つ、7号鉢以上は1つしか出品できない。

馬込シクラメン園の経営主であり、馬込園芸組合会長波多野は、協和町大字小栗7002-1に8反5畝（2,550坪）を購入、1988年からシクラメンの夏季栽培を始めた。動機は檜原村での先細りと、東京での相続問題であった。海拔50mの栃木県二宮町に近い蓬田新田の狐塚古墳の南隣りの土地は君島惣一の紹介で農業委員会が斡旋してくれ、1反400万円、計3,400万円。1988年は檜原村での契約が残っていたので山上げしたが、1989年は協和町のみで栽培し、6,500鉢栽培している。夏季は章と長男（28才、東京農大卒）の2人か、一方のみがここに住み込んで世話をする。施設は12.5坪の家、物置2、井戸（深さ70m）。5時～9時は1鉢1鉢に水をやるための4時間を要す。1週間か10日に1度

消毒する。殺虫剤や殺菌剤は種類が多く、暑いと薬害が出る。強い日射を避けるために1本2,000円する簀子をかけるが、6,500鉢では200本も必要である。簀子は4年間はもつ。12、1月には花粉付けし、5月には採種、9月下旬には播種するが、これらは中馬込での仕事である。シクラメンでも20数種類あり、種が自給できない場合は種苗会社から買う。一般にピンクのものが多く、赤だけでも4種、白も2種ある。中馬込は3反(900坪)の土地に350坪の温室と本宅があり、81才の父武男、妻、長女、次男が住んでおり、章も週2回は中馬込へ日用品と食料をとり帰る。協和町～中馬込は110km、2時間、松原村は60kmしかないのに2～3時間かかった。

10月中旬にはシクラメンの鉢を中馬込へ運び、ハウスで最後の仕上げをして庭先販売する。出荷は11月中旬から始まり、11月下旬は贈答用が多くなり、クリスマスでピークを迎える。5年前より宅急便を利用し、大阪、秋田、山形などへもプレゼントとして発送し出した。売れ残った場合には花市場へ出荷するが、川崎、荻窪市場へ5回ほど出荷したことがある。4月以降はアジサイなどが主力製品となる。花卉収入の外、市街地農家の常として、父がアパート・貸家・駐車場をやっている。協和町での若い男1人の夏半年の栽培生活は、松原村での山上げ委託に比べれば、自分で栽培管理できる喜びがあるは半面、日常生活が一人で淋しい難点がある。協和町での近所づきあいはない。

IV お わ り

松原村の林業に依存してきた産業基盤が高度経済成長期に入って崩壊し、人口の流出と在宅兼業化が進んだ時期に、市街地農業化し花卉栽培に專業化しつつあった東京都大田区馬込の農業のシクラメンの山上げ栽培が導入された。その後の発展と衰退をみると、次のようにまとめることができる。

1. 松原村の社会、経済構造の変化を補うような形で山上げ栽培が導入され、1970年代までは、多少人口の流出と地域経済の活性化には役立った。
2. 地理的、生態的にもシクラメンには山上げが必要であり、軽井沢よりは高度は低いものの、距離的に近い松原村が土地節約型農業として発展でき、村の現金収入源となった。
3. 委託する側にとっても、通勤栽培のような形で農業が行え、事実上の経営面積の拡大ができた。
4. オクルショックで中断はあったものの、1960年、70年と続いた経済成長は生活のゆとりを生じ、花卉類への需要を呼び起こし、花の少なくなる冬季の花としてシクラメンの需要が伸びた。贈答用品として以前は食品が喜ばれたが、飽食の時代になって花などがそれに代わるものとなってきた。
5. 松原村としても、受託栽培で養ったシクラメン栽培を、若い層や一部の意欲ある者が拡張し、受託範囲を地域的に広げ、かつより近いところから受入れ、半製品から完製品として出荷するなど、地域の産業として成長してきた。
6. 委託側も、より高度なものを、よい施設でよい条件で大量生産できるように、神奈川県緑区に転住したり、茨城県協和町に農園を新設し、新しい時代に対応している。

本調査は昭和63年、平成元年度文部省科研費「花卉・野菜の山上げ栽培と生産地形成に関する生態地理学的研究」(No.63580184)(代表 斎藤功)の一部を利用した。

参 考 文 献

- 犬井 正 (1979) : 秩父山地における近郊山村の農林業の変化
 - 東京都西多摩郡桧原村の例 -, 新地理, 27-1
- 沢田裕之 (1982) : 北埼玉における花卉園芸地域の形成と構造
 - 深谷市藤沢地区の場合 -, 立正大学北埼玉地域研究センター年報, 5.
- 佐々木博 (1986) : 多摩川流域の農業, 『多摩川誌』第1章1節 (河川環境管理財団).
- 秋池 功 (1986) : 鴻巣市における花き園芸地域の発展, 埼玉地理10.
- 斉藤 功 (1988) : 高冷地を活用した園芸農業の諸形態, 環境情報科学17-1.

Cyclamen Culture in Hinohara - mura, Tokyo

Hiroshi SASAKI

Hinohara - mura (village) lies the western most of Tokyo-to (prefecture), 56km west of Tokyo central station. It has the smallest population (4,012), but the 3rd biggest area (104.9 squarekilometer) in Tokyo-to in 1985. The village is very mountainous and the 93% of the territory is covered with mountain forest, which gave the people the main jobs before the 2nd World War, e.g. charcoal making and lumbering. The population has been decreasing since 1960, and the number of farm households more quickly, owing to commuting to the neighbouring towns as part time labourers (table 1). The 93% of farm households is mainly side job farmers. The industrial structure of Hinohara has been shifting from primary sectors to tertiary sectors (table 2). The main industries in Hinohara are manufacturing, wholesales and retails, and service industries.

Cyclamen culture began in Hinohara by nine farmers under the contract with flower horticulturists in Magome in Oota-ku (city ward), Tokyo, who bring cyclamen in 12cm (diameter) flowerpot in July. Contract farmers in Hinohara take care of cyclamen by watering, getting rid of the dead or rotten leaves, shading in hot summer days etc. in the cool climate on the wooden shelves on arable land or slope at an altitude of 400-500m. They transplant cyclamen two or three times to 18cm or 21cm flowerpot as cyclamen grow up. In the middle of October cyclamens are transported to the glasshouses in Magome in Oota-ku, and are sold between November and Christmas. Some farmers in Hinohara grow cyclamen now not in contract but for themselves and sell the flowers to tourists, flower shops or markets.



写真1 茅倉の吉沢 宏の棚
(1988. 10. 11)

南向急斜面に設けられた木棚の屋根はビニールで覆われている。棚下の余地にも大根が植えられ、立体栽培 (Etagenbau) が行なわれている。

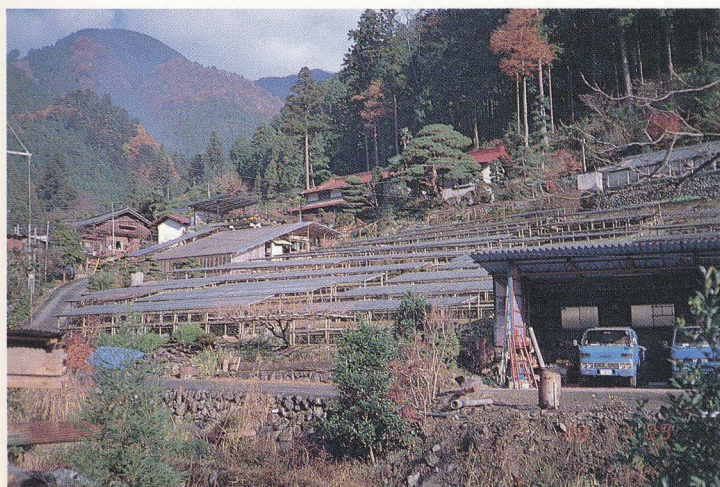


写真2 泉沢の高取茂代のシクラメン園 (1988. 11. 29)

南西向斜面に9段ほどの棚が設けられ、赤い屋根の母屋と倉の右手に温室がみえ、温室では最終製品を自主栽培している。



写真3 上川苔の山本福松の新しいスチールパイプの棚 (1988. 11. 29)

1987年に委託業者が木棚に代って110坪の棚を新設。棚の上方にカンラン・大根・茶が見られる。



写真4 上平の高橋 享花園
(1988. 10. 11)

4棟の加温温室の中にはシクラメンが咲き、露地にはペゴニアが並んでいる。右端の南秋川の崖縁まで花鉢と温室で埋めつくされている。



写真5 高橋 享花園でのシクラメンの移植
(1988. 10. 11)

プラスチックの6寸・7寸鉢に、土とともに植え換え、出荷に備える。雇傭労力なしでは維持できない。



写真6 茨城県協和町にある波田野 章の新しい夏季シクラメン園 (1989. 8. 30)

85aの山林を開いて2年目の海拔50mの平地に6,500鉢が栽培されている。強い日射を除けるために簀子がかけられ、背後に瓦屋根の管理棟と栃木県との境をなす山稜が見える。